

新情報

児童福祉の先覚者・孤児救済に私財を投じ全力を尽力した

おおのただしろう

大野唯四郎（1839-1884）：兵庫県丹波市

天保十年（1839）、氷上郡葛野村上新庄（現丹波市氷上町）の豪農、庄屋の土倉平右衛門の五男として生まれる。名を八太郎といい、幼少年期は和田村小畑（現丹波市山南町）の儒学者・植木環山の「学半館」で、学問（儒教精神：万物に対する愛念）を身につける。

※六男の名は土倉市郎。西園寺公望公の従僕となり東京銀座二丁目（吟香の住居兼店舗「楽善堂」の付近）に居住し、唯四郎の東京での活動を全面的に協力する。文久三年（1863）、石原村（現丹波市市島町）の豪農、庄屋の大野三郎兵衛の婿養子となり、唯四郎と改名。翌年から庄屋に次ぐ役職「年寄」に就任する。明治元年（1868）、この頃から孤児を引受け養育し、貧民の子らへ米や金の救済に尽くす。

※幕末～明治初期にかけ続く動乱期は、庶民の生活が苦しく各地で一揆騒動が頻発し多くの浮浪孤児が村中にあふれていた。

明治五年（1872）、唯四郎の慈善活動が認められ、豊岡県より表彰を受ける。

明治八年（1875）、大阪島之内に私財を投じ孤児の収容施設「愛育舎」を設立する。

明治九年（1876）、家財道具を投げ打ち「大セリ市」を敢行する。

明治十年（1877）、下竹田村（現丹波市市島町）明新校（小学校）の教員を引き受けたが、月給三円五十銭は残らず生徒のために使用する。

明治十一年（1878）、

三月、京都の高倉で小室信夫（しのぶ）を訪ねたとき、小室から新時代の思想家、実業家として岸田吟香の存在を教えられる。

※小室信夫（天保十年（1839）－明治三十一年（1891））：丹後岩滝村（現京都府与謝野町）の絹商家に生まれる。京都で討幕運動に参加。明治七年自由民権運動の端緒となる「民撰議院設立建白書」を起草する。

前半は丹波、丹後で精力的に啓蒙活動し、後半は上京して岸田吟香や渋沢栄一など維新の先駆者たちと交流、相談を受けた吟香は下竹田の育児所を「愛育堂」、寄付台帳を「愛育堂慈恵金人名録」と命名した。長三洲から「愛育」の木額を受け、具体策を固めた後帰丹し開堂準備を進める。

※長三洲（天保四年（1833）－明治二十八年（1895））：明治五年（1872）頒布の新学制の中心的起草者となり文部大丞を務める。「愛育」の額面を揮毫する。

明治十二年（1879）三月、兵庫県知事の認可を受けた「愛育堂」が完成、開堂式を行い運営を開始する（養育孤児 27 名）。更に三条実美の助言を得て大阪堺市に孤児院を開設する。

※吟香がいつ社員（社友）になったのか

明治十二年（1879）十月で終わっている唯四郎の日記の最後に、「東京愛育社 慈恵金人名録」が付けられている。その中に、明治十二年（1879）十月までに正式に「東京愛育社」がスタートした、ということはない。準備段階で、「オープン的时候には、社員（社友）として、または約束の金額（品物）を寄付します。」という「人名録」を作っていた。

※「東京愛育社慈恵金人名録」中に、「東京愛育社友 岸田吟香」、「育児養育慈恵 予約左ニ 小児着物三拾枚 岸田家内」が掲載されている。

明治十三年（1880）、大阪島之内の育児施設が府知事の認可を受け、正式に「愛育社」として出発。以降、丹波、大阪などの孤児養育事業を軌道に乗せるため奔走する。

※大阪、東京、京都、長崎などで愛育社計画があったが、正式にスタートし続けたのは「大坂愛育社」のみだった。

※明治十九年（1886）、唯四郎の意思を継ぎ、堺市妙国寺境内に児童養護施設「大阪愛育社堺支社」を開設する。

※昭和二十七年（1952）、「社会福祉法人愛育社」（堺市中区八田南之町）と改称する。

※明治十三年（1880）以降十六年（1883）まで吟香と関わったが、東京愛育社の動きは全く不明である。

明治十七年（1884）一月一日、越前永平寺方面を行脚中、不慮の事故（雪深い山中にて谷に転落）にあい道半ばでこの世を去る。享年四十五歳だった。

出典・大野唯四郎顕彰碑説明板

・歴楽 ichijima 令和 2 年 11 月号

『大野唯四郎日記』を読む（3）

資料製作：青木正文

・歴楽 ichijima 令和 4 年 4 月 16 日

『大野唯四郎日記』を読む（4）

資料製作：青木正文

※文面の一部について青木氏から助言を受ける。

（2022.4 岸田吟香を語り継ぐ会）